

## マレーシア・ジョージタウンにおける 華人の伝統／文化イベントとしての儀礼

——「宝福社甲辰年請火大伯公香花車大遊行」を事例として

横田 浩一

### 一 はじめに

本稿はマレーシアペナン州ジョージタウンにおける儀礼について、その歴史的背景について整理しながら、現地での観察で得られたデータに基づいて論じるものである。マレーシアは多民族国家であり、本稿が対象とする華人<sup>1</sup>は2016年のセンサスによるとマレーシアの人口の21.4%を占め、660万人となっている。ただ華人の人口には偏りがあり、クアラルンプールやシンガポールと接するジョホール州などマレーシアの主要な都市部で人口比率が高くなっている [田崎 2021 : 52]。本稿の対象となるペナン州ジョージタウンもまたそのような華人比率の高い都市の一つである。

近年の華僑華人研究では、世界各地に調査に赴いた研究者によるいわゆる「中国さがし」 [片岡 2017] が批判的に捉えられている [津田・櫻田・伏木 (編) 2016]。それは、華人あるいは中国という枠組みを研究者が設定し、各地で中国的な要素を探し出し、中国的要素の持続や変容について論じるという行為を指している。このような議論は華僑華人研究に相当程度のインパクトをもって受け止められた一方で、「華人は〇〇である」という研究者の認識論を批判的に捉えてミクロな行為実践にこだわるあまり、特定の集団やエスニシティが想起／創造されるという視点が不十分であるといった問題が指摘されている [河合 2019 : 122]。つまり、華人が中国らしさを表象する際に、それは個々人の行為だけではなく、それ

---

<sup>1</sup> 華人とは、一般に居住国の国籍を保持する中国出自の者を指す。近年の華僑華人研究では、居住国の国籍を保持しない中国籍者＝華僑と、居住国の国籍を保持する華人とをことさら区別せずに表記する傾向にある。本稿では、居住地や国籍を問わず、中国に出自を持つと認識する人、される人を華人と呼ぶこととする。

を取り巻く行政やメディア、学術機関などを考慮に入れて分析する必要があることを意味している。また、華人を「華人らしい」存在であると表象しているのは研究者だけではなく、当の華人自身である場合もある [河合 2019 : 122]。以下で論じるように、ジョージタウンの華人は自分たちを積極的に華人であると表象し、アピールしているように見える。そして、その背景にはジョージタウンの華人がたどった複雑な歴史と現在のマレーシアの政策が関わっており、華人が中国にルーツがあることを単に強調して、現在の中国とのつながりを表明しているわけではない。

このような議論を踏まえた上で、ジョージタウンにおける華人の「遊神」儀礼について以下で描いていく。遊神とは、神像を神輿や車に乗せて一定のルートを練り歩く儀礼である。本稿では遊神を起点として、縦糸としてのマレーシアにおける華人の移住の歴史やジョージタウンの民俗宗教、その母体となる組織との歴史的関係について整理する。他方で、横糸として現在のマレーシアにおける観光政策や華人の位置付けなどを交差させて論じていく。こうすることによって、華人の宗教がどのように想起／創造されているのかマレーシア社会における文脈から示すことを意図している。以下では、二節で調査地の概要を整理し、三節で遊神の実施組織の歴史と信仰の対象となる神、秘密結社との関係について論じ、四節で遊神儀礼に現地での調査に基づいて描く。そして五節でこれまでの議論を整理して結論を述べる。

なお本稿の調査は、海域アジア・オセアニアプロジェクト東京大学拠点の研究の一環として行った。調査機関は2024年2月15日から2月28日までであり、期間中はジョージタウン、イポー、クアラルンプールの各都市に滞在した。

## 二 調査地の概要

調査地であるジョージタウンはマレーシアの北西部に位置するペナン州の州都である<sup>2</sup>。18世紀以降、ペナンはマラッカ、後にはシンガポールも加わってイギリスによる海峡植民地と

---

<sup>2</sup> 本稿では、ペナン島と対岸にプロヴィンス・ウェルズリーを含む地域は「ペナン州」、ペナン島全体を指す「ペナン」、ペナン島の中心市街を指す「ジョージタウン」を適宜使い分けることとする。

しての整備が行われていった。マラッカ海峡における東西貿易の中継地の一つとしての歴史を持つジョージタウンには、中国系、インド系などさまざまな地域にルーツを持つ人々が住み、発展してきた。2008年にはマラッカとともに「マラッカ海峡の歴史的都市群」としてUNESCOの世界遺産に登録された。現在ではマレーシアでも有数の観光地として知られ、筆者が訪問した2024年2月はちょうど中国の春節休暇と重なったため、多くの中国人観光客でジョージタウンの市街は賑わっていた。

ジョージタウンの都市としての特徴はその人口構成にある。マレーシア全体では華人の人口比率は2割強、ペナン島対岸のプロヴィンス・ウェルズリーを含むペナン州の華人比率は45.6%だが、ジョージタウンを含むペナン島北東部地域の華人人口は61.9%に達している [田崎 2021 : 52]。これはイギリス統治時代に商工業に従事した華人が主としてコミュニティを形成していった歴史があるためである。

ペナン島開発は、1786年にイギリス東インド会社がマレーイスラム国のクダからペナンを獲得したことで進展した。同年、東インド会社のカントリー・トレーダー（私貿易商人）であったフランシス・ライトはペナンの行政長官に就任する。同時にペナン島で最初の町の名前をジョージ3世にちなんでジョージタウンと名づけた。さらに1800年にはペナン島の対岸地区を割譲してプロヴィンス・ウェルズリーと名づけた。イギリス東インド会社がペナンを獲得した当時、ペナン島にはマレー人158人が居住するのみだったとされるが、ライトの上陸前後からペナン島の人口が増加し、交易が拡大していった [篠崎 2017 : 53]。

現在のペナン州はマレーシア国内において独自のポジションを築いている。政治的には左派野党のDAP（Democratic Action Party、民主行動党）が1969年以降州議会選挙で票を獲得しており、2008年の総選挙ではDAPがペナン州の政権を握って人民連盟州政権を発足させた [篠崎 2020 : 50]。また政府系投資会社を通じて世界遺産の保護活動を行う機関シンク・シティ（Think City）をジョージタウンに設立し、2009年から2014年まで人材育成、建築物の保全、無形文化財の保護、企画・設計など合計239件に約1,630万リンギット（1リンギット33.9円で約5億5,000万円）の助成を行った [篠崎 2020 : 59-60]。このように、ペナン州は野党勢力が強い地盤であるとともに、政府系機関からの助成金も流れ込むようになり、文化遺産の保護や開発を推進することが可能となった。

### 三 ジョージタウンにおける華人の秘密結社と信仰

#### 1 ジョージタウンの秘密結社

ペナン開発史において、最も初期かつ最大の移民集団は華人であるとされ、彼らは社会や経済において重要な役割を果たしていた [重松 2019 : 117]。当初彼らの多くは漁師や雑役としてイギリスやオランダの東インド会社に雇用されたが、次第に力を蓄えていき、一部の者は商人や買弁として働くようになり、職人や小商い、雑役などの各種職業に就く者も出てきた。こういった初期の移住者たちは、東インド会社にとって極めて便利かつ不可欠な存在だった [重松 2019 : 118]。

18世紀末には1,000人未満であったペナンの人口は、1858年には6万人に増大した。そのうち、華人が2万8,000人、マレー系が20,000人、インド系が1万2,000人と華人が半数近くを占めていた [重松 2019 : 118]。彼らが移住先のペナンで頼りにしたのは「幫」と呼ばれる同業、同郷あるいは同族によって結成される組織である。この幫はしばしば秘密結社と説明されることもある。しかし、存在そのものが秘密というわけではない。歴史学者の山田によると、秘密結社は以下のような特徴を持つ。①秘儀——秘密の存在、②試練と誓約をともなう加入儀礼、③広域的な相互扶助の実現 [山田 1998 : 12] である。ただし①については山田も述べるように、結社の存在そのものが秘密というよりも、結社の内面（秘儀、結社の目的、原現況、活動、構成メンバーなど）が外部の視線を拒んでいることを意味している [山田 1998 : 12]。また、③の特徴に見られるように、親族や身よりのない肉体労働者が多かったジョージタウンをはじめとした東南アジアの華人社会において、秘密結社に加入する（または、強制的にさせられる）ことによって相互扶助のセーフティネットを構築する意味もあった。この秘密結社は多くの場合、物質的な基盤としては「公祠」や「会館」と呼ばれる建物を保有していた。ペナン島ジョージタウンでは、中心市街地にある華人通りに廟や会館が形成され、現在でも残っている。

イギリス植民地政府は、秘密結社を利用することで間接的に華人を統治した。華人の移住者が日に日に増加する中で、無法地帯であったジョージタウンで方言集団や職業集団に基づ

く秘密結社が個々人の安全保障を担うようになった。植民地政府は秘密結社の頭目に「カピタン」の称号を与えることで、徴税を請け負わせて確実に税を徴収するとともに、自分たちの問題を自分たちで解決してもらい治安維持を図ることを目的としていた [重松 2018 : 220、239]。一方で秘密結社の頭目にとっては、徴税権を与えられ、アヘンや酒の専売権を獲得することは富と名誉と権力を同時に得ることを意味した [渡辺 1983 : 176]。ジョージタウンの華人カピタンのほとんどは秘密結社の頭目でもあり、アヘンや肉体労働を行うクーリー（苦力）貿易を独占していた大商人でもあった。

篠崎によると、19世紀のペナンの華人社会ではセンサスに基づく6つのカテゴリーがあったという。それは、福建人、海峡生まれ、広東人、潮州人、客家人、海南人である。しかし、実際に華人社会で生きていく中で重要だった区分は、「福建幫」か「広東幫」かのいずれに属しているかだった。この両者の違いは、単に省の地理的範囲と一致するものではなく、「福建幫」は「漳州および泉州出身の厦門語を話す人々」であり、それ以外は「広東幫」に属するものとされた。それは「海峡生まれ」の人々や客家も同様であった。つまりこれは、福建系または広東系のいずれかの秘密結社に所属せざるを得なかったことを意味しており、たとえ福建省出身の客家であっても「広東幫」に属していたのである。実際に当時の華人（そのほとんどが男性）の7割から8割が何らかの秘密結社に所属していたとされる [渡辺 1983 : 174]。

## 2 大伯公とは何か？

ジョージタウン中心市街地には19世紀初頭にアルメニア商人が多く居住したアルメニア通りがある。ここに19世紀後半以降に次々と福建出身の華人が進出した結果、「打銅仔街」と呼ばれるようになった [重松 2019 : 215]。これは生活用品であった銅製品を製造する職人集団が多く居住したことにちなんでおり、この時期に大量に流入した華人をそれ以前から居住していた人々と区別して「新客」と呼ぶ。この新客を糾合して勢力を拡大したのが、福建出身者によって結成された秘密結社「建徳会」である。建徳会は「福建五大姓」といわれる初期の移民である邱、林、謝、楊、陳氏（陳氏は福建省泉州府同安県を、林氏は泉州府惠安県を出自とし、それ以外の三姓は漳州府海澄県を出自とする）のメンバーのうち、邱氏が中

心となって結成された秘密結社であり [渡辺 1983 : 166]、アルメニア通りの入口に「大伯公 (*Tua Pek Kong*)」という神を祀る廟を 1844 年に建てた。彼らは「大伯公会」と自称していた。

東南アジア華人社会で大伯公とは一般にどのような神とみなされ、どのような人々に信仰されていたのだろうか。先行研究によると大伯公とは、人格神、人格神が水神へと変化したもの、郷土神、全国的にみられる土地神など様々な解釈がなされている [張・張・利 2014 : 120]。一方 Chia は、大伯公に関する研究を整理した上で、①秘密結社の神、②マレーシア華人の神、③華人ディアスポラの過程で中国化した神の三つの性格から論じている [Chia 2017]。また、福建では土地神のことを「伯公」とは呼ばず、一般に「土地公」や「福德正神」と呼ぶ。にもかかわらず、ジョージタウンでは福建人が土地神を伯公と呼んで祀っていることについてその理由を探った研究がある。陳志明はこの問題に対して、客家がもともと土地神を「伯公 (おじさん)」と呼んでおり、潮州でも一部ではこの名称が用いられたため、彼らはマレーシアでも引き続きこの名称を用い、それが普及したことで福建人やマレーシア華人全体でもこの名称が作用されることになったのではないかと推測している [陳 2001 : 18]。つまり、華人の方言集団間の相互交流によってこの名称が生まれたという解釈である [陳 2001 : 18-19]。ペナンの華人社会では、大伯公 (写真 1) は張理の人格神であると一般に捉えられている。張理は、広東省大埔出身の客家であるとされ<sup>3</sup>、フランシス・ライトがペナン島に到達する前に入植していたとされる人物である。建徳会はペナンの開拓者である張理を守護神として大伯公と呼んで祀り、相互扶助を行う組織として形成された [白 2023 : 284]。

---

<sup>3</sup> これには異論もある [張 2013 : 39]。異論の主な内容は、そもそも客家地域から来たのかどうか、または広東省大埔ではなく福建省永定人ではないのか等である。張維安は客家が自分たちに都合の良い存在として張理を客家の人格神として用いたのではないかと指摘している。



写真1 宝福社の大伯公像(中央) (2024年2月17日、筆者撮影)

### 3 建徳会と宝福社

建徳会は、アルメニア通りを拠点にペナンで勢力を拡大した。その数は1854年に3,000から4,000人に上った〔渡辺 1983 : 168〕。また、建徳会は華人だけではなく、アルメニア通りに隣接するアチェ通りに拠点を置くアチェ・ムスリムの秘密結社「紅旗会 (*Bendera Merah*)」と手を結び、アルメニア通り一帯をこの多民族連合の支配下に置いた〔重松 2019 : 216〕。

一方、時を同じくして「義興会」という秘密結社も台頭してきた。義興会は、もともと広東・福建出身者を主体としてシンガポール・マレー半島一帯になわばりを持つ秘密結社であり、そのペナンでの勢力は1854年時点で15,000人であった〔渡辺 1983 : 168〕。ただし、ペナンの義興会では泉州・廈門を出発港とした福建人は除外されていたという〔渡辺

1983 : 164]。義興会はまた、1856年に組織されたヒンドゥーおよびムスリムのインド系とマレー系移民を主体とした「白旗会 (*Bendera Putih*)」と結託し勢力を拡大していた [重松 2019 : 216]。他方で、1822年創立の「海山党」は、初期は広東人が主体であったが、後に1840年代から60年代にかけて起こった中国本土の動乱（太平天国の乱、客家・本地の械闘<sup>4</sup>）によって多数の客家がペナンに流入し海山党に入会した。その結果、海山党内部で客家の勢力が強くなり、広東系の秘密結社と対立するようになった [渡辺 1983 : 164-165]。このように、ジョージタウンの華人秘密結社は広東系の「義興会」、福建系の「建徳会」、客家系の「海山会」が大規模勢力として存在した。そして建徳会と海山会は後に連携して義興会に對抗するようになった [Wong 2015 : 63-67 ; 渡辺 1983 : 165]。

これら組織<sup>5</sup>は1880年代まで相互に対立していた。その原因は経済的な利害をめぐるものであったとされており、義興会と建徳会はペナンおよびマレー半島内陸錫地帯の利害をめぐる長年の対立を激化させていた [渡辺 1983 : 188]。このような状況下で、1867年にペナン大暴動が発生する。義興会と建徳会のアヘン専売権をめぐる対立を直接の原因としながら、白旗、赤旗というマレー／ムスリム組織や、ペラ、プーケットなどの周辺地域の関連組織を巻き込み、大規模な紛争に発展した [篠崎 2017 : 166]。しかし1874年にイギリスが介入することでこの衝突は収拾した。「会」や「会党」とも呼ばれる秘密結社の多くは、1873年以降危険結社 (*Dangerous Society*) に指定され、植民地政府の管理の対象となった。1877年以降はさらに管理が強化され、1889年には社団法令が設けられることになり、1890年にはその法が施行され結社が事実上禁止された [今堀 1973 : 44]。すなわち、植民地政府は秘密結社を反社会的な組織と位置づけたのだった。

その後、1890年に福建人による大伯公を祀る宗教団体「宝福社」が成立した。設立の趣旨として、「廟内に祀られる品々に責任を持ち、幸福、繁栄および正義の神明である大伯公を族

---

<sup>4</sup> 械闘とは、村落間や宗族（父系出自集団）間における武力闘争である。土地や水などをめぐって争いが発生する契機となることが多い。

<sup>5</sup> 上記以外にもペナンには秘密結社が複数存在した。「和勝」、「存心」、「義福」を合わせて六大会党と呼ぶ [白 2023 : 177 訳注]。

人および地方人士のために維持すること<sup>6)</sup>とある。この宝福社は実際には、イギリス植民地政府によって解散させられた建徳会の後継組織であった。また1890年以降、福建五大姓がそれぞれ代表を務める五つの公司<sup>7)</sup>がそれぞれジョージタウン市内に1座ずつ計5座の廟を管理する団体を設置し、さらにはアルメニア通りの福建正神廟内に清和堂、同慶社を宝福社とともに社団として設置し、廟と神明の儀礼をそれぞれの社団の責任で執り行うこととした〔白2023：175〕。これらの組織図は(図1)のようになり、現在でも同様の組織が維持されている。危険結社とみなされた大伯公会であったが、その後も現在に至るまで儀礼を実施し続けている。

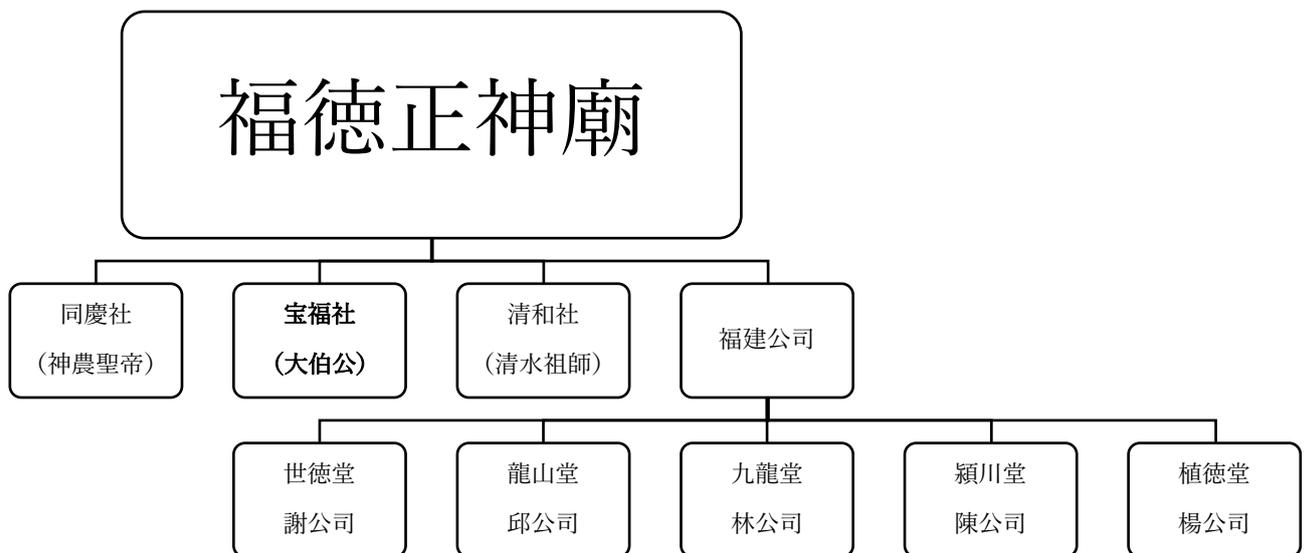


図1 ジョージタウン・アルメニア通り福德正祠の組織図 (括弧内は主祭神)

<sup>6)</sup> 星洲日報「福建華僑成立供奉大伯公 宝福社三角大旗先驅」2010年3月1日  
<https://www.sinchew.com.my/20100301/%E7%A6%8F%E5%BB%BA%E5%8D%8E%E4%BE%A8%E6%88%90%E7%AB%8B%E4%BE%9B%E5%A5%89%E5%A4%A7%E4%BC%AF%E5%85%AC%EF%BC%8E%E5%AE%9D%E7%A6%8F%E7%A4%BE%E4%B8%89%E8%A7%92%E5%A4%A7%E6%97%97%E5%85%88%E9%A9%B1/> 2024年6月3日閲覧

<sup>7)</sup> ここで言う「公司」とは現代中国語で言うところの単なる「会社」というだけではなく、競合に打ち勝つ手段としてしばしば武力に訴える点に特徴があった〔篠崎 2017：86〕。また、公司是秘密結社と表裏一体の組織でもあった〔渡辺 1983：148〕。

後述するように、宝福社は海珠嶼大伯公廟と密接な関係にある。海珠嶼大伯公廟（写真2）とは、ジョージタウン中心市街地から北東約4キロに位置するタンジュン・トコンの大伯公を祀った廟である。ここはペナンで最初の華人居住地ではないかと言われている場所である [白 2023 : 283]。この場所に1820年に建設されたのが海珠嶼大伯公廟である。1841年には惠州・嘉応・大埔・永定・増城の5つの客属（客家地域）が管理の責任を負うことになったとされている（写真3）。この伝承を記した石碑は1958年に建てられたものであるが、今堀は劉果因の研究<sup>8</sup>に言及しつつ、後世の作り話ではないかと断じている [今堀 1973 : 86]。その上で、「大伯公廟を五属（筆者注：五属客家）の支配下におき、これを安定させ、固定させるための工作にほかならない」 [今堀 1973 : 86] と断定している。



写真2 海珠嶼大伯公廟（2024年2月27日、筆者撮影）

<sup>8</sup> 劉果因 1971 「檳城最古的會館與神廟」『光華日報』1971年7月25日。筆者は未見。



写真3 客家五属海珠嶼大伯公廟の事務所（2024年2月27日、筆者撮影）

また張維安も「客家が海珠嶼大伯公廟の主権を主張するのは19世紀から20世紀の境目であるはずだ」 [2013 : 36] と述べている。そしてそれまでは広東人、福建人および客家が共同で祭祀する「公廟」であったと述べている [張 2013 : 36]。いずれにしてもこの廟が誰のものなのかについては争いを経て、現在では客家団体の管理する廟となっている<sup>9</sup>。また、現在では1年のうち4日間<sup>10</sup>は福建人が使用することが認められている。

以上のように、ジョージタウンにおける華人の秘密結社と信仰は、福建五大姓を中心とした団体である宝福社が大伯公を中心とした宗教団体を形成し、信仰を維持することで現在に至っている。このような本来は排他的な集団による信仰であったジョージタウンの大伯公は、歴史的な過程の中で他の華人系宗教団体などが参加する遊神を行うようになった。さらに現在では、イベントツーリズムを重視するマレーシアで観光客に見せるためのイベントに

<sup>9</sup> 海珠嶼大伯公廟が福建人の神なのか客家の神なのかをめぐる起源や解釈については [張 2013] を参照のこと。

<sup>10</sup> 旧暦の1月14日から17日までの4日間は宝福社が海珠嶼大伯公廟や客家団体の管理する隣接する廟の大伯公像を使用する。

もなっている。では、現在のジョージタウンで大伯公をめぐる儀礼がどのように実施されているのか。次節で取り上げたい。

#### 四 ジョージタウンにおける伝統／文化イベントとしての儀礼

##### 1 観光立国マレーシアとイベントツーリズム

マレーシアへの外国人訪問者の観光行動について概要を記した『マレーシアの観光政策』によると、2010年時点での主な州別訪問先（複数回答）で、クアラルンプール・スランゴールに続いてジョージタウンを中心市街地とするペナン（39.2%）が第2位を占めている〔財団法人自治体国際化協会 シンガポール事務所 2013：3〕。

マレーシアは1990年代から本格的な観光立国を目指してきた。1997年に「Malaysia Truly Asia」キャンペーンを開始してから外国人訪問者数は1,000万人を超え、2007年の「Visit Malaysia」キャンペーンでは2,000万人を超えた〔藤巻 2016：137〕。新型コロナウイルス流行前の2019年には2,600万人を超える外国人訪問者数となり、昨年2023年は2,014万人と訪問者数は回復基調にある<sup>11</sup>。

ペナンは世界遺産として認定される以前から、イベントツーリズムに力を入れている。マレーシア政府は、短期間に多くの集客が期待できる国際的なイベントの開催に2000年頃から力を入れており、後述するジョージタウンの一連のイベントもこの文脈に位置付けられる。マレーシアの観光政策について論じた藤巻によると、3つの観点からその戦略を読み解くことが重要となるという。第一に、高所得社会実現のためのツーリズム（外貨獲得、雇用機会増大）という観点である。第二に、国家ブランド発信戦略としてのツーリズムであり、マレーシアの認知度、評価を高める戦略である。具体的には市街の清潔さ、治安の良さ、建築物の壁の塗り替えによる景観の維持などを行っている。第三に国民統合政策ツールとしてのツーリズムである。つまり、「自然豊かで、多種多様な民族・言語・宗教集団や歴史的経緯を異にするさまざまな地域の歴史・文化から成り立っている、世界に稀なる（ユニークな）「わが

---

<sup>11</sup> Malaysia Tourism Statistics in Brief <https://www.tourism.gov.my/statistics> 2024年6月3日閲覧

国」を国民に「再」発見させること（ディスカバー・マレーシア）を通じて、（中略）あらためて国民意識の醸成、マレーシア人の意識の覚醒を促すねらいがあった」〔藤巻 2010 : 49-50〕のである。

実際にペナンでは、アート<sup>12</sup>、音楽、フードをはじめとした多くのフェスティバルが年間を通して開催されている。それら以外にもマレー系や中華系、インド系の伝統的な年中行事もイベントスケジュールとしてマレーシア観光局のWebサイトに列挙されている。本稿で取り上げる宝福社の伝統的儀礼もまた文化イベントとして位置づけられている。筆者がジョージタウンに滞在している期間中、「Chinese New Year Events in Penang」と題して、春節期間中に関連する18のイベントが開催された（表1）。これらは地元の新聞、ネットニュース、観光局、ホテルのロビーなどに掲示され、広く宣伝されていた（写真4、5）。

**表 1 2024 年春節期間中にペナン州で開催されたイベント一覧**

日時（旧暦）	イベント名	場所
1月29日（12月19日）	バターワース 10,000 ランタンライトアップフェスティバル	バターワース
2月4日（12月25日）	ニューイヤーラン	ペナン島ビーチストリート
2月10日から3月7日（1月1日から27日）	極楽寺新春ランタンライトアップ	ペナン島
2月11日（1月3日）	ペナン州首席部長曹観友新春祝賀会	スパイスアリーナ、ジョージタウン
2月11日（1月3日）	ニューイヤーウォーク	1st アベニューモール、ジョージタウン
2月13日（1月4日）	新春祝賀会	バターワース斗母宮
2月14日（1月5日）	蛇寺請火儀式	ペナン島
2月16日（1月7日）	仟人斉撈生	バターワース斗母宮
2月17日（1月8日）	天公生誕祭	ペナン島周棧橋

<sup>12</sup> ジョージタウンにおけるアートツーリズムについては〔鍋倉 2018〕が詳細に論じている。

2月17日(1月8日)	第33回天宮フェスティバル	ペナン州ブキ・ムルタジャム天宮
2月17日(1月8日)	天公生誕祭	バターワース斗母宮
2月18日(1月9日)	廟会	ジョージタウン世界遺産地区
2月23日から24日(1月14日から15日)	廟会	バターワース観音亭斗母宮
2月23日から26日(1月14日から17日)	廟会	バターワース天福宮
2月24日(1月15日)	元宵節	ブキ・タンブン
2月24日(1月15日)	元宵節	ジョージタウン・エスプラネード
2月24日(1月15日)	宝福社請火大伯公香花車大游行	ジョージタウン宝福社からスタート
2月24日(1月15日)	元宵節	バターワース斗母宮



写真4 ホテルのデジタルサイネージで表示される廟会マップ (2024年2月17日、筆者撮影)

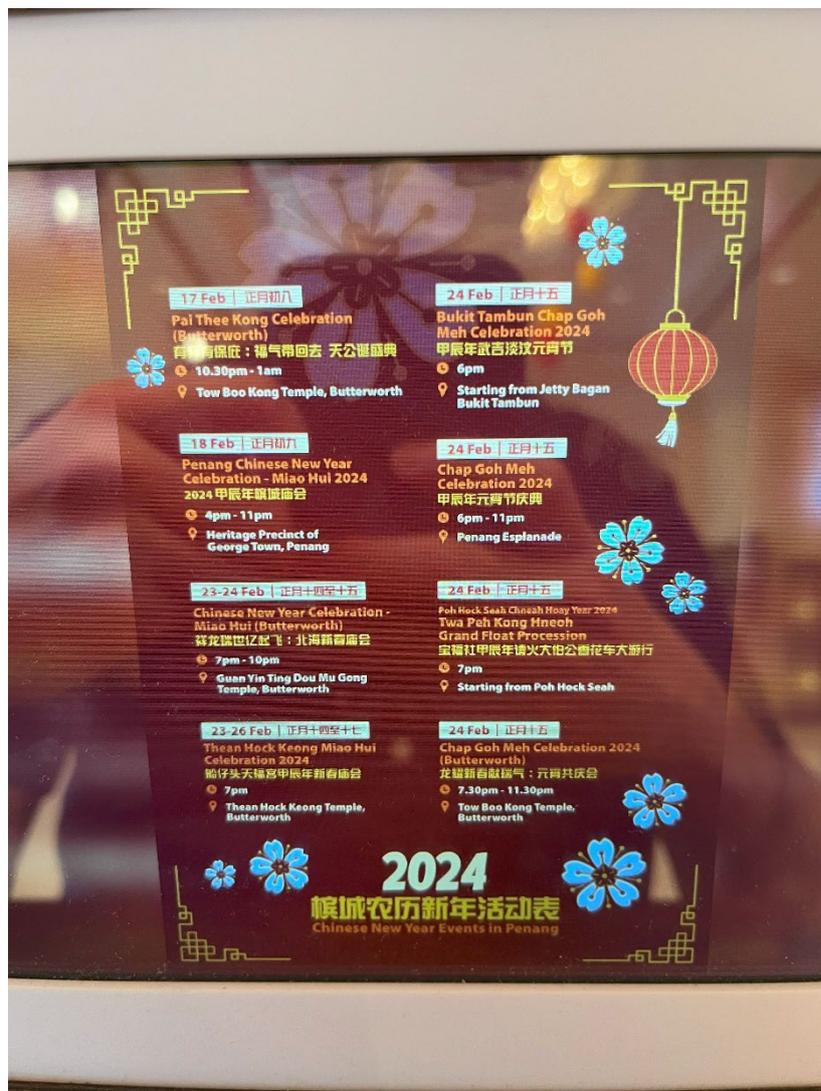


写真5 ホテルのデジタルサイネージで表示されるペナンの春節イベント

(2024年2月17日、筆者撮影)

実際に庙会<sup>13</sup>などの期間中には、多くの観光客を見かけた。イベントそのものに参加している様子を見かけるだけでなく、夕食時の屋台や華人街での食事の際にも中国をはじめとした国からの観光客がペナンに多く来ていた。このようにペナンにおけるイベントは観光と一体化しており、観光客を引きつけること、国家イメージを向上させることだけではなく、

<sup>13</sup> 神明の生誕日などの記念日に祭礼を実施するとともに露天商人などを集めて行う行楽行事を指す。日本の縁日に相当する。

国民統合の象徴としての役割を果たすことを目指している。また、そういった意図はペナンを訪れたときに明白な形で観光客に宣伝されてもいる。

## 2 12年に一度の儀礼：「宝福社甲辰年請火大伯公香花車大遊行」

筆者がペナンに滞在している際、12年に一度の遊神が開催される機会と重なり、観察することができた。この儀礼は「宝福社甲辰年請火大伯公香花車大遊行」（以下、大遊行）と呼ばれ、宝福社が12年に1度、他の宗教団体の参加も募って開催する遊神である。本来は寅年である2022年に開催予定であったが、新型コロナウイルス流行の影響により、2024年まで開催が延期された。2024年は奇しくも大伯公廟が建設されてから180周年に当たる年でもあった。なぜ寅年である2022年にもともと実施する予定だったかという点、大伯公が乗る動物が虎であり、虎は用心棒だとみなされているからである。あるいは、大伯公は虎の化身となつて特定の地域や場所を保護することもあるとみられているためである〔白 2023：284〕。虎は大伯公と密接な結びつきがあるとされる動物であり、ゆえに寅年に大遊行を実施することになっている。

宝福社は前述のように大伯公廟を管理する宗教団体の名称であり、甲辰年は六十干支での暦を指している。また「請火」とは、もともと廟の神が祖廟に里帰りする、あるいは元いた場所の廟に感謝を伝えるために香炉に火をともし儀礼である。後述するように、ペナンではこの儀礼に独自の解釈がなされている。

大遊行は、旧暦1月15日、つまり旧暦で1年最初の満月の日である元宵節<sup>14</sup>に実施される。大遊行に先だって、前日である旧暦1月14日午後には、「請火」のために宝福社の幹部や「炉主」と呼ばれる年度ごとの神像や香炉を管理する責任者、「頭家」と呼ばれるコミュニティのリーダー、信者らとともに神像を車に乗せて海に面した海珠嶼大伯公廟まで出向く。出発する前にまず宝福社で大伯公に線香を捧げ、礼拝を行う。その後、14時15分の吉祥の時間に、宝福社の副主席が黄金の大伯公像を降ろす。神棚に仮安置し、神社の前の広場を三周

---

<sup>14</sup> 中国南部では、村落単位で遊行を実施することが多く、儀礼を行うことで一年の無事や村落の平和を祈ることが多い。

してから、出発した<sup>15</sup>。

陳耀威はペナンの請火について以下のように描写している。「海珠嶼の請火儀礼では、アルメニア通りの宝福社が遊神を行い、この廟まで神を招請しにやって来る。夜になって潮で岩礁が隠れるまで待ったら、理事たちは鉄の門を閉めて信徒が入れないようにする。照明を消してランタンに火を点し、黒い旗を香炉にかぶせ、一斉に銅鑼を鳴らし香炉から炎が出るように煽る。理事は毎年、香炉の炎の高さや強さから新しい1年の上期、中期、下期の景気を予想する」[陳 2008]。当日は、旧暦1月14日の11時45分頃から儀礼が始まり、12時には火をつけて旗を燃やす。黒い旗を香炉にかぶせる動作は3回行い、炎の様子を見て景気を占う。その際に、多くの信徒がここを訪れ、炎を見物する。また、その様子はテレビや新聞、ネットニュースなどで報道される。今年(2024年)の景気は1月から4月までの上期は上、5月から8月までの中期は中、9月から12月までの下期は中と占いの結果が出た。これは去年よりも良いという。もともと請火は1年の景気予測をする儀礼ではなかった。なぜそうなったかは不明だが、第二次世界大戦後の1946年から上記のような景気予測が行われるようになったとされ、華人が経済を重視している証左だとみなされている [陳 2008]。

翌日の元宵節には、夜に神像を載せた花車(飾り付けをした山車)の行列をジョージタウンの市街地で走らせてパレードを行う。普段の年も毎年宝福社のみの遊神は実施し、これを「大伯公請火遊神」と呼ぶ。しかし毎年開催される遊神はあくまで宝福社のみの儀礼であるという点で大きく異なる。12年に一度の大遊神は宝福社だけではなく、ペナン州および周辺地域の中華系の廟や団体がこの儀礼に参加することが可能となるのである。2024年の場合、当日は52の団体が参加し、50台の花車(写真6、7)が行列を行った(表2)。行列の順番は各団体のリーダーが参加する抽選で事前に決められる。また、ペナン州の首席部長、州議員、国会議員などの政治家も貴賓として招かれてパレードに参加する。

---

<sup>15</sup> 筆者は、「請火」儀礼のこの一連の部分は未見である。当日の様子は以下の新聞記事を参照している。光明日報「宝福社配合請火儀式 大伯公金身移駕海珠嶼廟」2024年2月23日  
<https://guangming.com.my/%E5%AF%B6%E7%A6%8F%E7%A4%BE%E9%85%8D%E5%90%88%E8%AB%8B%E7%81%AB%E5%84%80%E5%BC%8F-%E5%A4%A7%E4%BC%AF%E5%85%AC%E9%87%91%E8%BA%AB%E7%A7%BB%E9%A7%95%E6%B5%B7%E7%8F%A0%E5%B6%BC%E5%BB%9F> 2024年6月4日閲覧



写真6 電飾で光る花車(吉南斗母宮) (2024年2月24日、筆者撮影)



写真7 電飾で光る花車(金靈壇) (2024年2月24日、筆者撮影)

表 2 宝福社甲辰年请火大伯公香花车大游行参加団体の行列順、団体名および主祭神

順	団体名称	主祭神
1	宝福社	——
2	顯明壇	中壇元帥
3	檳州大旗鼓公会	—
4	北馬大旗鼓公会	—
5	宝福社大旗鼓鑼鼓花車	大伯公
6	檳城丹絨道光本頭公嶼区大伯公理事会	大伯公
7	天靈殿	広沢尊王
8	開山王廟	開山王鄭成功
9	中心壇	九皇大帝
10	檳城四條路街区福德正神、檳城五六条路福德正神、檳城淡水港区菜市慶贊中元及大伯公理事会、檳榔嶼聖義宮、檳城江沙律及景貴街区慶贊中元委員會、仙祖壇	大伯公 関帝聖君 九位仙祖
11	檳城南山寺	黄眉童子
12	峇都眼東蓮清宮	蓮花山大人
13	靈應堂 檳城過山孫劉二王府	広沢尊王 孫劉二王
14	聚仙堂	八仙与之首鉄拐李
15	檳城丹絨武雅金山大伯公	大伯公
16	發林万善府陰府大二爺伯	大二爺伯
17	檳城双溪頼區大伯公	大伯公
18	安順律万山區福德正神公会	福德正神
19	靈海殿	東海哪吒
20	檳城双溪頼湖仔内広福宮玄武山	玄天上帝

21	檳城社尾街福德祠福德正神	福德正神
22	閩打賀丁加奴律福德祠大伯公廟	大伯公
23	玻璃池滑福壽宮大伯公	福德正神
24	峇都蘭樟萬山福德正神	福德正神
25	丹絨武雅福德祠	福德正神
26	檳城泗山清福德祠	福德正神
27	玉封進福宮	五方中壇大元帥
28	七條路及南京路大伯公	大伯公
29	香港巷斗母宮	九皇大帝
30	金靈壇	中壇元帥
31	檳城立信花園斗母宮	九皇大帝
32	頭條路斗母宮九皇大帝	九皇大帝
33	天海山玉皇太子	玉皇太子
34	元宮宮	護國尊王護介公
35	檳城社尾大士爺	大士爺
36	大山脚譚公廟	譚公仙聖
37	馬來西亞檳城三江廟大普公	大普公
38	北海斗母宮	九皇大帝
39	大山脚阿裡瑪花園福德大伯公廟	大伯公
40	威中中港癩濟廟	濟公活仏
41	大山脚天師廟	張天師
42	北海甘光峇汝福德祠	福德正神
43	大山脚魚池城隍廟大二伯爺	大二爺伯
44	大山脚南美國福德正神及拿督公	福德正神 拿督公
45	顯靈宮 (雙溪裡蒙)	大伯公
46	居林吉南斗母宮	斗母元君

47	仁孝社	—
48	贊化壇	(道教団体)
49	宝福社戦鼓 (九天)	—
50	宝福社大伯公香炉及金身神轎輦花車	—

以下ではこの儀礼について、時間を追って順番に描写していく。まずは、18時半頃から宝福社前で爆竹を鳴らし、廟の前の道路および廟の敷地内で獅子舞を披露する。その後それに引き続いて周辺の道路で待機していた花車が行列になり通りをパレードする。ジョージタウンのメインストリートの一つであるマスジット・カピタン・クリン通りには多くの観光客が詰めかけ、筆者も含めてその多くがスマートフォンやカメラで撮影を行っていた（写真8）。それぞれの廟は最大で3台までの花車を行列に参加させることが許可されており、これがその廟の資金力や信者数などを表わしていると言われる。遊神に参加するのは華人に限定されておらず、表2の3や4、5のような旗を持って太鼓を鳴らす行列にはマレー系やインド系の若者も参加する。

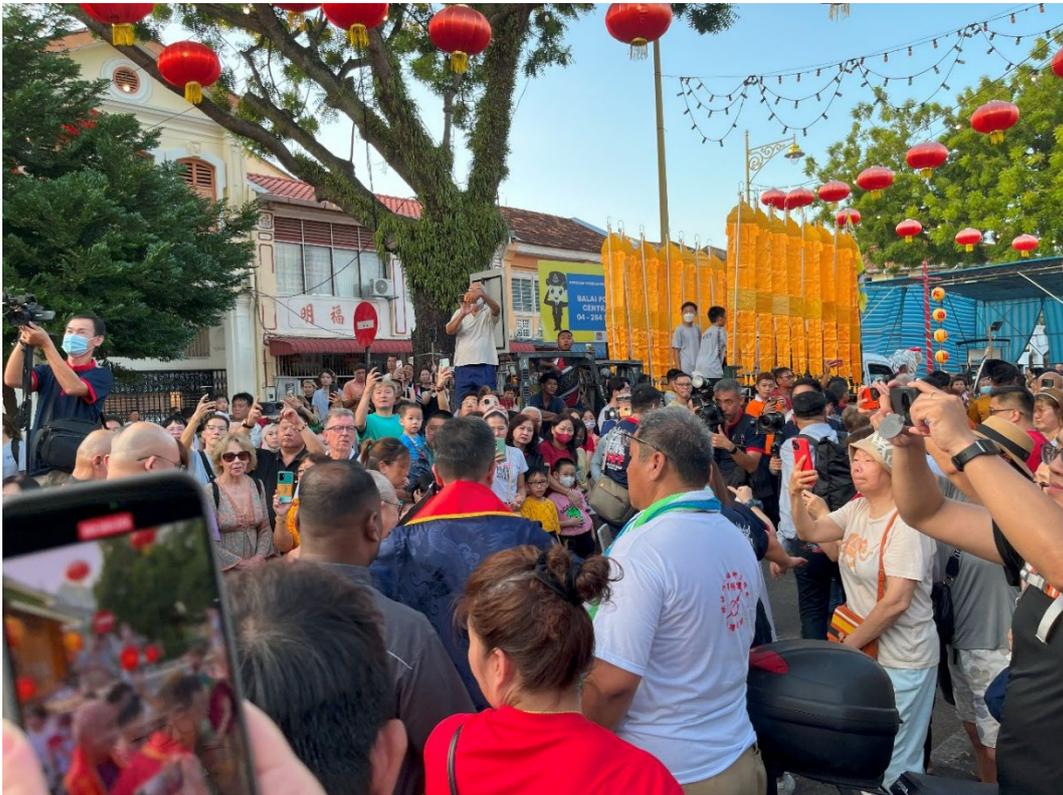


写真 8 遊神を撮影する人々（2024年2月24日、筆者撮影）

花車にはどの廟や宗教団体であるかを示す横断幕が掲げられており、信者は花車に乗って観衆に手を振る。また花車に乗る信者、およびその周囲を歩いたりオートバイに乗ったりして行列に参加する信者は廟の団体名を示すそろいのポロシャツを着ていることが多い。花車には信者の子どもたちも多く乗り、観衆に手を振ってくれる。

花車そのものは単に神像を載せるだけでなく、電飾や装飾などが施された煌びやかなものが多く、あたかも自分たちの廟がいかに多くの信者数を誇り、廟が賑わっているかを示すかのようである。また、「神将」という神や信者を守る仮装をした人々が行列に参加している。

遊神のルートは図1のようになる。全行程はおよそ10キロとなり最後には23時過ぎに宝福社に戻ってくる。各所に警察官が配置されており、交通安全や治安の維持に努めている様子が観察された。

**POH HOCK SEAH CHNEAH HOAY \* TWA PEH KONG HNEOH GRAND FLOAT PROCESSION 2024**  
**15th Day Procession**

Saturday, 24th February 2024 (15th Day of Lunar 1st Moon)

Grand Float Procession  
 Saturday, 24th February  
 2024 (15th Day of Lunar  
 1st Moon)

7:30 pm - Procession  
 from Poh Hock Seah at  
 Lebuh Armenian via Jalan  
 Masjid Kapitan Keling,  
 Lebuh Chulia, Jalan  
 Penang, Jalan Burma,  
 Jalan Pangkor, Jalan  
 Perak, Jalan Anson, Jalan  
 Macalister, Jalan  
 Gudwara, Lebuh  
 Sandilands, Jalan CY  
 Choy, Lebuh Pantai,  
 Lebuh Gereja, Jalan  
 Masjid Kapitan Keling  
 back to Poh Hock Seah at  
 Lebuh Armenian.

大伯公香花車大游行  
 农历正月十五日（公元二  
 零二四年二月廿四日，星  
 期六）

下午七时半 - 游行队伍由本  
 头公巷寶福社出发 - 椰脚街  
 - 牛干冬街 - 檳榔路 - 车水  
 路 - 邦咯路 - 霹靂路 - 安顺  
 路 - 中路 - 风车路 - 八条路  
 - 崔耀才路 - 土库街 - 义兴  
 街 - 椰脚街 返回寶福社。

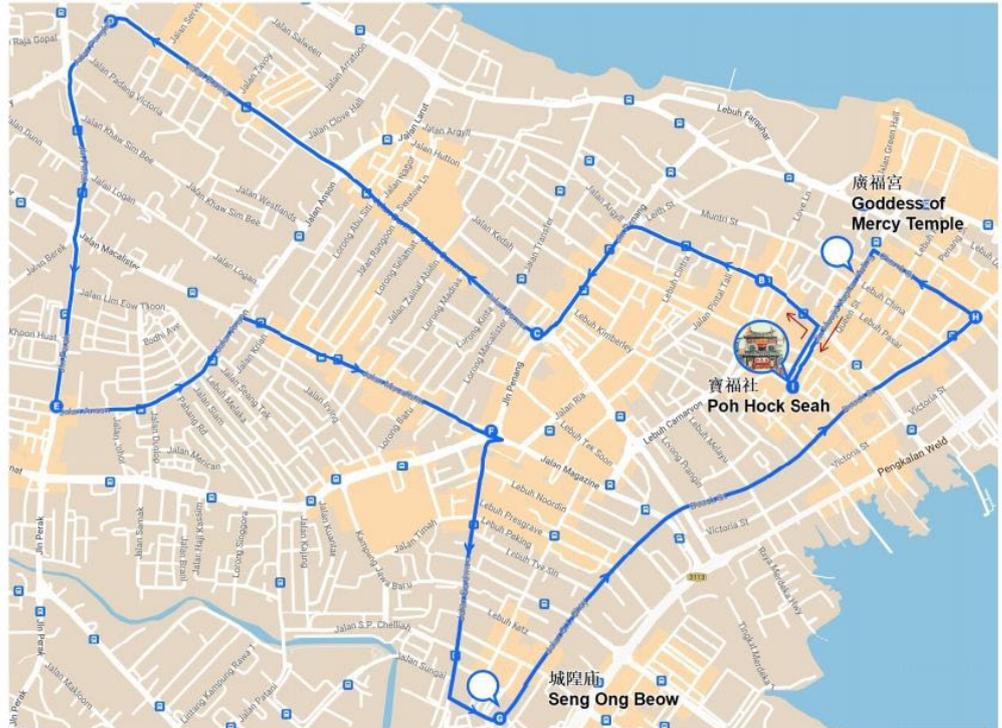


図1 宝福社甲辰年请火大伯公香花車大游行のルート<sup>16</sup>

(『光華日報』2024年1月28日より)

行列の順番と団体名、主祭神から以下のような点を指摘できると思う。①46「居林吉南斗母宮」以外はペナン州からの参加である。②最も多い神明は福德正神（大伯公）、次に多いのが九皇大帝<sup>17</sup>である。③客家の信仰とされている譚公やマレーシアで潮州人の信仰とされて

<sup>16</sup> 光華日報「宝福社大伯公香花車大游行正月十五復辦 52 支队伍参与」2024 年 1 月 28 日  
<https://www.kwongwah.com.my/20240128/%E5%AE%9D%E7%A6%8F%E7%A4%BE%E5%A4%A7%E4%BC%AF%E5%85%AC%E9%A6%99%E8%8A%B1%E8%BD%A6%E5%A4%A7%E6%B8%B8%E8%A1%8C%E6%AD%A3%E6%9C%88%E5%8D%81%E4%BA%94%E5%A4%8D%E5%8A%9E-52%E6%94%AF%E9%98%9F%E4%BC%8D/> 2024 年 6 月 4 日閲覧

<sup>17</sup> マレーシアの九皇大帝信仰については、原田 [1979] を参照のこと。

いる玄天上帝など<sup>18</sup>、他の方言グループが管理する団体も参加しているとみられる。④10、13など連盟で参加するケースもあり、おそらく廟の規模や資金力の問題があり、合同での参加となっていると思われる。⑤3, 4, 5, のように、各地の旗や太鼓の団体が参加することで通常の遊神とは異なる華やかな雰囲気添えることになっている。

翌日の旧暦1月16日には「犒軍」儀礼が宝福社で行われた。これは遊神の期間中に廟や信者を保護してくれた将兵をねぎらうために食べ物の施しを行う儀礼である。会場には長いテーブルを置き、肉や野菜、汁物、春雨の入った椀を並べ、箸、白米の入った茶碗、飲み物用の茶碗を2膳分銘銘に、さらにパックのお茶やビールを並べる（写真9）。また、ローストした豚や鶏も供物としてテーブル前方の祭壇近くに並べてある。祭壇が置かれた場所から一番遠い場所には米、油、袋麺、缶入りのクッキーなどが置かれる。道士を招き、儀礼は16時に開始する。開始と共に銅鑼を鳴らして、道士（写真10）が道教の儀礼規範や儀礼で用いる文言が書かれた科儀文書を読み上げる。東、西、南、北、中心を色ごとに表わす紙<sup>19</sup>でできた馬の名前を道士が書く。つづいて鞭で地面を数回打ち、祭壇を清め、宝福社敷地内の広場に方角に基づき馬を配置する。馬には草と五穀を表わす五色の豆を与える（馬の前に置く）（写真11）。その後、大きな盆に載せたクッキーや飴を周囲に投げる。これは将兵に褒美を与えることを意味しているという。事前に折ってあった紙銭を馬の周囲に置き、紙の馬とともに燃やす。これで儀礼は終了となる。その後、ローストした豚をはじめとした供物は信徒だけではなく、その場にいた人々で分けて食べた。

---

<sup>18</sup> マレーシアにおける神縁とエスニシティについては [Tan 2018] が参考になる。

<sup>19</sup> 陰陽五行説に基づき、東は青、西は白、南は赤、北は黒、中央は黄色で表現される。



写真9 犒軍儀礼の際に机に並べられたご飯や飲み物スープや炒め物  
(2024年2月25日、筆者撮影)



写真10 犒軍儀礼を執り行う道士 (2024年2月25日、筆者撮影)



写真 11 東西南北中央に配置された紙の馬（2024 年 2 月 25 日、筆者撮影）

この儀礼をわざわざ見物に来る観光客は多く見積もって 20 名程度であった。道士を呼んで粛々と儀礼が進められる点に特徴がある。前日に行われた派手で煌びやかな大遊神とは対照的に、観光イベントとしての宣伝は一切なされておらず、筆者も宝福社に行って初めてこの儀礼の存在を知った。

このように、ジョージタウンにおける儀礼は観光客に広くアピールするものとそうでないものに分けられている。また、前者はテレビ、新聞などのメディアでも大々的に取り上げられる傾向にあるが、後者は特にその存在を知られずに淡々と実施されている。

## 五 考察と結論

ジョージタウンにおいて12年に一度開催される「宝福社甲辰年请火大伯公香花车大遊行」は、以下のような特徴がある。

通常1年に一回行われる宝福社の元宵節の遊神儀礼（＝大伯公請火遊神）とは異なり、他の団体も参加可能である。この儀礼に参加すること、参加できたことそのものがステータスになる。というのも、花車を出すこと、人を集めて現地に行くための交通費、参加者の飲食費、そろいのポロシャツの制作費、大遊神への参加費用などを合わせると多額の経費が必要となるからである。そのため、廟や団体の「面子<sup>20</sup>」を立てるためにも参加したいと考える人が多いと現地で話を聞いた。また、大遊神に参加限ったことではないが、遊神に参加した際に廟などの宗教組織はその時の写真を額に入れて廟内に貼りだしている（写真12）。こういったことから、大遊神に参加することはペナン州においてそれだけの名誉があるとみなされていることが分かる。

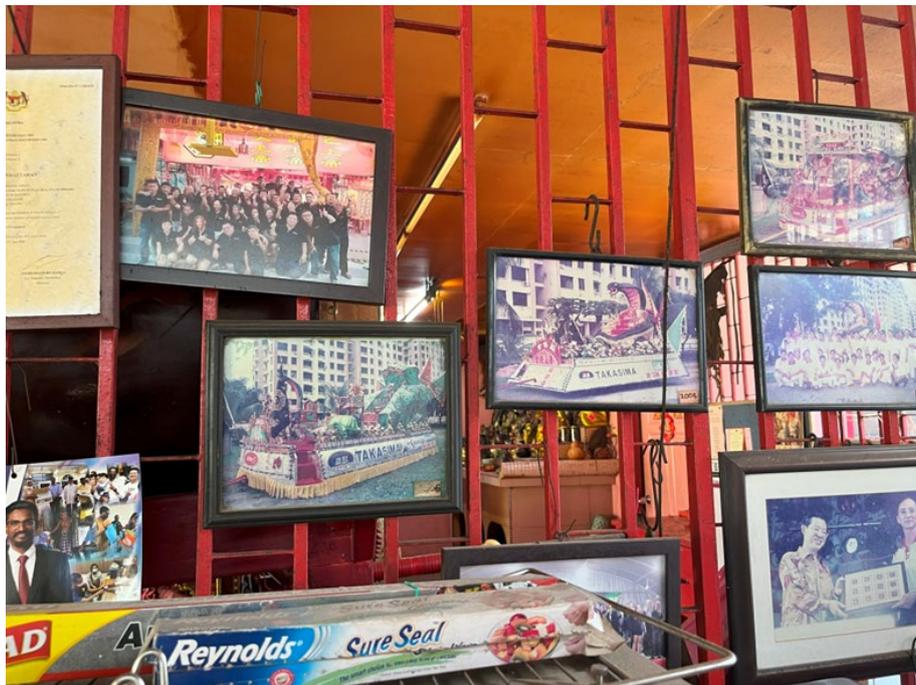


写真12 遊神の花車の行列に参加した際の写真（2024年2月25日、筆者撮影）

<sup>20</sup> ここでの「面子」とは、能力が評価されていること、特別な存在であると認知されていることを指している。

また、他の方言集団も参加可能であることもこの儀礼の特徴として指摘できる。この点は、ペナンに特徴的な秘密結社ごとの境界を超越した相互の結びつきや一体性、団結が体現され、強調されていることから分かる。もともと宝福社は福建五大姓を中心とした福建南部出自の人々の宗教団体であり、それ以外の人々はそこから排除されていた。一方、大遊神前後のイベントはあくまで宝福社のみの儀礼としての側面が強く、ペナン開拓の守護神を祀る海珠嶼大伯公廟との関係性の顕示や、宝福社および信者を守ってくれたことへの感謝という内向きの儀礼としての性格が強調される。

さらに DeBernardi が指摘するように、大伯公に関わる儀礼は秘密結社の歴史を想起させるものでもある [白 2023 : 176]。すなわち、宝福社およびその前身である建徳会の歴史は、ペナンの福建幫が海山党に所属する客家の人々を味方に付けながら開拓した者の人格神＝大伯公を祀ることで自らの集団の繁栄を願った歴史を思い起こさせる。これは陳志明がマレーシアの華人宗教について分析する際に用いた「再領土化 (reterritorialize)」という概念 [Tan 2018] とも重なる。ここでの再領土化とは、華人が中国の民衆宗教を移住先にも持ち込み、現地の新たな環境のなかで宗教を再創造・再生産することを意味している [Tan 2018 : 7]。つまり、大伯公という信仰に引きつけて考えるなら、マレーシアという文脈の中で大伯公信仰が形成されて独自の意味を付与されたと同時に、秘密結社の守護神として勢力が拮がり、中国における土地神という文脈からは一定程度切り離されたのである。大伯公を土地神とみなすなら、中国における神々のパルテノンでは通常、地位の低い神と考えられる。しかし、Chia が述べるように、神々を国家における権威構造のメタファーであると捉える<sup>21</sup>中国とは異なり、東南アジアにはもともと官僚制が存在しなかったために、「伯公 (おじさん)」と呼ばれる身近な神が好まれた [Chia 2017 : 449]。このように大伯公信仰は単なる土地神ではなく、集団の守護神として考えられており、身近でありながら頼れる存在である。DeBernardi によると、4年に1度ペナンのすべての大伯公が集まり花車の遊行を実施するという [白 2023 : 293 注 29]。この儀礼は1905年に始まって現在に至るとされる [白

---

<sup>21</sup> 神々のパルテオンを国家の権威構造のメタファーとして捉える代表的な研究として Feuchtwang [2001] がある。

2023 : 175-176]。ペナンでは大伯公は方言集団にかかわらず広く信仰されているので、福建系ではない人々とも一緒に遊行を実施することで秘密結社同士の対立の歴史と和解することを目的としていたのだろう。

こういった伝統儀礼という側面がある一方で、大遊神には文化イベントとしての儀礼という要素もある。春節期間中の一連の行事そのものがホテルのフロントや、観光センター、地元メディアで宣伝され、観光資源化されていた。そこでは見世物の一つとしての華人文化が立ち上がり、また観衆はそれを期待している。派手な装飾が施された花車のパレードはその代表的なものの一つである。ただ、このパレードを見ているだけでは秘密結社の歴史を垣間見ることはできない。

このような文化イベントとして華人の年中行事が鑑賞の対象となる要因には、マレーシアにおける華人の立ち位置が関係している。マレーシア華人の中元節について分析した櫻田は、「中元節は伝統的な華人の宗教儀礼の枠組みのみにあるのではなく、マレーシアという他エスニックグループの存在が常に前提となる文脈において行われる儀礼である」[櫻田 2007 : 34] と述べている。大遊神もまた、福建系華人または華人全体という集団の枠組みにとどまるものではなく、マレーシア社会の他のエスニック集団や世界各地から訪れた観光客にまでも華人としての自己表象を提示する契機となっていた。その背景にあるのは、マレーシア社会における「人種政治 (racial politics)」がある [Tan 2018 : 126]。陳は以下のような指摘も行っている。「廟での祭祀や遊神のような宗教的祝典は、華人の参加者にとって単に重要というだけではなく、華人の文化やアイデンティティを公的に表現する場となる」。「こういった側面は、マレー系が支配的で人種が政治化する政治的環境のなかで強まり、儀礼がより丁寧に祝われるようになった」[Tan 2018: 25]。すなわち、華人はアイデンティティの発露、団結力の誇示、政治的権利の主張などを、宗教的儀礼を通して行っていると考えられる。これは同時に、マレーシアでは自らが華人であることを常に意識せざるをえない環境にあると理解することにもなる。

以上のように、大遊神はもともと建徳会という排他的な秘密結社の信仰に起源を持ちながら、多くの廟や団体が大伯公の名の下に集うことで秘密結社の境界を超えて相互の結びつきや一体性を強調する儀礼となった。他方で、文化イベントとしての儀礼には、マレーシア国

民の中で華人の文化やアイデンティティを対外的に表現する場となる。これはまた、国民統合の象徴としての華人をツーリズムの中で表現しているとも見られる。このような、歴史的な過程における華人としての一体性の発露としての伝統儀礼である大遊神（縦糸）と、現在の政治的環境における文化やアイデンティティの表現の場としての文化イベントである大遊神（横糸）という重なり合いのなかで儀礼は成り立っている。これは、華人集団同士の同一化と、マレーシア華人の他のエスニック集団との差異化という二つの異なる動きと読み替えることもできるだろう。

ペナンの華人の政治参加をめぐる議論の中で篠崎は、華人の文化的固有性を常に中国との関係で規定してきたとして先行研究を批判し [篠崎 2017 : 32-35]、20 世紀初頭のペナンでは自らの文化的固有性を周囲に示し、それが周囲に認知されることでペナン社会に居場所を確保すること、意思決定の場に代表者を立てる資格があることが認識されていたと論じている [篠崎 2017 : 386]。時代が異なるため単純に現代に当てはめることは慎まなければならないが、上記の議論を本稿の事例に則して考えるなら、華人をめぐる議論は中国と現地華人社会の関係、中国とのネットワーク、海外における中国文化の持続と変容だけにとどまるものではないと指摘できる。つまり、華人としての文化的固有性を維持し表現すること、現地社会の歴史や政治の中で立ち現れてくる「華人らしさ」に目を向けることが重要であると示している。このような視点でペナン華人の大伯公信仰を見ると、大伯公はマレーシアで再解釈された結果、新たな意味づけを与えられた神であり、秘密結社の神として華人に崇拝されるようになったと言える。その秘密結社はまた、単なる方言集団ごとのまとまりを超えた現地社会の権力争いによって生じた新たな分類であった。マレーシアにおいて華人であるということ、そしてジョージタウンという都市の世界遺産、国際観光都市という性質、歴史の絡まり合いといった様々な要素の中で大遊神が成り立っていた。かれらは自らを華人であると表象することで、秘密結社の分類を超越した華人の一体性や団結心を表わすとともに、華人としての文化的固有性を示すことで逆説的に多民族国家マレーシアという国家への統合を表現していた。

冒頭で述べた議論に立ち返ると、マレーシアにおける華人の中国的要素とは、表面的には中国と似通って見えるものであったとしても、マレーシアにおいて新たに創られ、

意味を付与され、人々が居場所を確保するためのものである。そのため、単に中国らしい要素を探すというよりも、もしそれを現在の中国との関係の中でのみ考察してしまうとすれば問題含みになるだろう。たしかに「華人らしさ」はマイクロな個人の関係性で立ち現れてくる側面もあり、それをつぶさに観察する必要があることは論を俟たない。しかし、マレーシアにおける「華人らしさ」は、マレーシアにおける歴史や政治環境の中でのエスニック集団の一つとしての「らしさ」の表出でもあり、これがどのような文脈で想起／創造されているのか、今後も考察していく必要がある。

### 参照文献

- 今堀誠二 1973『マラヤの華僑社会』アジア経済研究所。
- 片岡 樹 2017「書評 津田浩司・櫻田涼子・伏木花織（編著）『華人』という描線」『華僑華人研究』17：64-67。
- 河合洋尚 2019「書評 津田浩司・櫻田涼子・伏木香織（編）『「華人」という描線——行為実践の視点からの人類学的アプローチ』」『文化人類学』84(1):120-122。
- 櫻田涼子 2007「マレーシア華人社会における儀礼の変容——中元節の事例から」『筑波大学地域研究』28：12-36。
- 財団法人自治体国際化協会 シンガポール事務所 2013『マレーシアの観光政策』Clair Report No389。
- 重松伸司 2019『マラッカ海峡物語——ペナン島に見る多民族共生の歴史』集英社。
- 篠崎香織 2017『プラナカンの誕生——海峡植民地ペナンの華人と政治参加』九州大学出版会。
- 篠崎香織 2020「2108年総選挙におけるペナン州での地方政党の復活——マレーシアの連邦・州関係の新局面」『マレーシア研究』8・9：43-66。
- 田崎亜希子 2021「マレーシアの国民形成における華人の統合に関する研究——その様態とコミュニケーション政策の役割の検討を中心に」武蔵野学院大学博士学位論文。
- 津田浩司・櫻田涼子・伏木香織（編） 2016『「華人」という描線——行為実践の場からの人類学的アプローチ』風響社。

- 鍋倉咲希 2018「観光によるアート概念の再構成——マレーシア・ジョージタウンのストーリーアート観光を事例に」『観光学評論』6-1：19-34。
- 原田正己 1979「マレーシアの九皇信仰」『東方宗教』53：1-21。
- 藤巻正己 2010「ツーリズム[in]マレーシアの心象地理——ツーリズムスケープの政治社会地理学的考察」『立命館大学人文科学研究所研究紀要』95：31-71。
- 藤巻正己 2016「世界遺産都市ジョージタウンの変容するツーリズムスケープ——歴史遺産畜の観光化をめぐるせめぎあい」『立命館文学』645：137-163。
- 山田 賢 1998『中国の秘密結社』講談社。
- 渡辺 惇 1983「十九世紀植民地マラヤにおける華人社会と会館・会党」酒井忠夫（編）『東南アジアの華人文化と文化摩擦』巖南堂書店、pp.145-218。
- Chia, Jack Meng-Tat 2017“Who is Tua Pek Kong? The Cult of Grand Uncle in Malaysia and Singapore.” *Archiv Orientalní* 85, no. 3: 439-460.
- Feuchtwang, Stephan 2001 (1992) *Popular Religion in China: The Imperial Metaphor*. Richmond: Curzon Press.
- Malaysia Tourism Statistics in Brief <https://www.tourism.gov.my/statistics>
- Tan, Chee-Beng (陳志明) 2018 *Chinese Religion in Malaysia: Temple and Communities*. Leiden: Brill.
- Wong, Yee Tuan 2015 *Penang Chinese Commerce in the 19<sup>th</sup> Century: The Rise and Fall of the Big Five*. Singapore: ISEAS Publishing.
- 陳 耀威 2008「請火」『星洲日報』2008年3月2日。
- 陳 志明 2001「東南亞華人的土地神與聖跡崇拜」『廣西民族学院学報』23(1)：17-24。
- 白 璿 2023『帰属之儀：馬來西亞檳城華人社群的記憶，現代性与身分認同』徐雨村訳、新北：左岸文化 (DeBernardi, Jean 2004 *Rites of Belonging: Memory, Modernity, and Identity in a Malaysian Chinese Community*. Stanford: Stanford University Press)。(引用は Amazon Kindle 版位置番号で示す.)
- 張 維安 2013「馬來西亞檳城海珠嶼大伯公的族群性格：客家与福建之間」『東南亞客家及其周边』張維安（編）、桃園：国立中央大学出納中心、pp.23-43。

張翰璧・張維安・利亮時 2014 「神的信仰、人的關係与社会的組織：檳城海珠嶼大伯公及其  
祭祀組織」『全球客家研究』第3期、111-138。

## 新聞

光華日報 2024 「宝福社大伯公香花車大游行正月十五復辦 52 支隊伍参与」2024 年 1 月 28  
日

光明日報 2024 「宝福社配合請火儀式 大伯公金身移駕海珠嶼廟」2024 年 2 月 23 日。

星洲日報 2010 「福建華僑成立供奉大伯公 宝福社三角大旗先驅」2010 年 3 月 1 日。

(よこた・こういち 人間文化研究機構／東京都立大学)